

① 名古屋市におけるカニ類の概況

名古屋市で今まで観察されたカニは、12科45種である。淡水産サワガニ以外は、潮の干満の影響を受ける名古屋港南部のふ頭海岸（潮見・稲永・金城）や市内を流れる河川の河口・河口干潟・ヨシ原に生息していた。

ふ頭海岸に生息するカニ

ふ頭岸壁下の岩・石の間に多く生息するイソガニ1種と、海底に生息しているカニは次の18種である。サメハダヘイケガニ、アミメキンセンガニ、ナナトゲコブシ、イッカククモガニ、イボイチヨウガニ、ガザミ、タイワンガザミ、シマアシイシガニ、ヒメガザミ、イシガニ、フタホシイシガニ、チチュウカイミドリガニ、ケブカエンコウガニ、マルバガニ、シワオウギガニ、シワオウギダマシ、トリウミアカイソモドキ、オオヨコナガピンノ。

海底に生息するカニは抱卵盛期に入ると、浅瀬に移動する。ふ頭に近づくものもあり観察が容易になる。

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニ

河口、河口干潟、ヨシ原、カキ礁や転石の下に生息するカニは次の24種である。

河口にはマメコブシガニ、オウギガニ、モクズガニ、オオシロピンノ。

河口干潟にはハクセンシオマネキ、コメツキガニ、チゴガニ、オサガニ、ヤマトオサガニ、アリアケモドキ。

カキ礁や転石の下にはケフサイソガニ、ヒメケフサイソガニ、ヒライソガニ、タカノケフサイソガニ。

ヨシ原にはアカテガニ、カクベンケイガニ、ユビアカベンケイガニ、クロベンケイガニ、フタバカクガニ、クシテガニ、ベンケイガニ、ハマガニ、アシハラガニ、ウモレベンケイガニ。

市内を流れる7つの河川の河口堤防は、コンクリートの垂直岸壁となっている。河口に干潟・ヨシ原が発達していない川が多い。河口、河口干潟、ヨシ原はカニの産卵や稚ガニの生育場所と親ガニの生育場所として重要な役割をしている。

庄内川は規模の大きい川で河口・下流に干潟・ヨシ原が発達している。河口干潟は藤前干潟へと広がっている。干潟周辺にカキ礁や転石がある。

次に規模の大きい天白川は上・中流域の水源となる丘陵や池が住宅団地となった。河口は、潮見ふ頭により、河口の自然環境が変化し、河口干潟・ヨシ原の減少で、カニの種類・個体数が減少した。

なお、ケフサイソガニは、形態的に区別し得る2型が存在することがわかり、ケフサイソガニとタカノケフサイソガニに分けられることになった（高野，2005）。2005年以前の標本は、区別しない。

このほか、外来種のミナトオウギガニが中川運河（木村妙ほか，2007）で、ハクライオウギガニが金城ふ頭地先（名古屋港管理組合，2018）および名古屋港ガーデン埠頭周辺で採集されている。

守山区東谷山のカニ

サワガニが生息していた。

② 名古屋市におけるカニ類の絶滅危惧種の概況

今回の調査の結果、絶滅危惧ⅠB類（EN）2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）4種、準絶滅危惧（NT）4種、計10種がリストに掲載された。

サメハダヘイケガニは潮見ふ頭南海岸、金城ふ頭南海岸の海底に分布しており、長期にわたり継続観察をすることができた。結果、減少傾向にあることがわかった。このカニは海底の汚れの影響を受け易い砂泥底に生息している。大型船舶の出入りが多く、汚れを受け易い場所である。生息場所の関係から、環境が更に悪化すれば消滅の危険性がある。清掃活動によりゴミ・油を回収し、海水の水質を浄化回復させることが必要である。

河口干潟に生息しているカニはスナガニ科のカニが多い。かつて庄内川・天白川の河口干潟にハクセンシオマネキ・コメツキガニ・チゴガニの大きい集団を観察することができた。両河川の河口にふ頭ができ、河口護岸工事が行われて干潟・ヨシ原が減少し、カニの個体数が激減した。庄内川の現状の自然環境の維持・管理が必要である。藤前干潟については、残された貴重な自然の保全が図られている（ラムサール条約登録）。河口は、モクズガニの産卵場所となっているが、稲永ふ頭によって河口面積狭く、海水の汚れの影響が考えられる。

ヨシ原に生息しているカニはアカテガニ・クシテガニ・ユビアカベンケイガニ・ウモレベンケイガニなど、ベンケイガニ亜科のカニが多く、希少カニが含まれている。

市街化により、各河川の堤防・河口をコンクリートの垂直岸壁とするための大規模工事が行なわれた。干潟・ヨシ原は減少し、カニの種類・個体数が減少した。開発を免がれた背割堤干潟・ヨシ原に希少なカニが生息している。

サワガニは守山区東谷山に生息しているが、市街化により丘陵地開発が進み、生息環境が変化し、個体数が減少した。生息地は限られており分散能力が低いので消滅の危険性大である。近年、生息を確認していないが、生息しているという報告はある。東谷山の溪流の自然植生と水理の保全などが必要である。